The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本古典文学における「死」の婉曲表現の形成 : 万葉集、古今和歌集、源氏物語を中心に
Author(s)	トカチェンコ, テチアーナ
Citation	詞林. 2025, 78, p. 17-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102895
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本古典文学における「死」の婉曲表現の形成

――万葉集、古今和歌集、源氏物語を中心に――

トカチェンコ　テチアーナ

一　はじめに

日本古典文学の研究において、死のテーマは重要な位置を占めており、現在、このテーマを多角的な視点から考察した膨大な数の研究が存在している。例えば辻本臣哉は、日本古典文学に見られる、仏教以前と仏教の死生観の違いに関する分析を行った[1]。この研究により、仏教以前の死に対する見方において「不浄」という概念が生まれた理由が明らかになった。また、死を「死者が山や海へ旅立つこと」として捉える概念や、魂と身体のつながりという概念がどのように生まれたかも明らかになった。この「不浄」という概念は、後に生じる「死のタブー」と密接に関連しており、したがって「婉曲表現」の概念とも関連している。

加藤明によれば、『万葉集』における死に関する表現はすべて挽歌に見られるという[2]。加藤は死に関連する表現を含む歌として、二三一首を指摘している。また、そのような表現の主な種類を七つに分類している。天、山、地、火葬、その他の埋葬方法、旅行中の死、その他分類できない表現などである。しかし、加藤明が挙げた死を含む歌の中には、現象やプロセスとしての死だけでなく、死後の世界を指して使われるものもある。例えば、著者が死を魂が雲に昇ることと考えている説では、九〇六番の歌にも触れている。

男子名を古日といふに恋ふる歌三首　反歌

● 布施置きて我れは乞ひ祷むあざむかず直に率行きて天道知らしめ（万葉集・巻第五・九〇六）

この歌は子供の死に捧げられてはいるものの、過程や状態としての死を示すような表現は含まれていない、その代わりに死後について詠んでいる。

『レトリック事典』によれば婉曲というのは「直接的な表現をあたりさわりのない穏やかな表現に換えることにある。この文彩は明らかに糞尿性、セックス、死の三大タブーと切っても切れない関係にある」と述べてある。婉曲表現というの

は、同義の不適切な表現に代わる中立的な言葉や表現である。従って、禁じられた表現の代わりに、修正されたより穏やかな表現が使われる。[3]

本研究においては、「死」という用語は、人が生命を使い果たす過程、あるいは存在しなくなる過程を指す。また、すでに起こった死の例や、死にたい、もうすぐ死ぬといった表現も、死を意味するものとして考える。プロセスとしての死だけでなく、状態としての死を表す用例も死の婉曲表現研究に適している。つまり、人が命を失う行為ではなく、その人が死んだ、あるいは死に近い状態と表現される場合である。また、この研究の枠組みでは、時間軸も重要ではない。つまり、その婉曲表現が生前に死にゆく人によって使われたものであろうと、死後しばらくしてから死んだ人に関連して別の人によって使われたものであろうと、すべての事例を分析に用いる。

本研究において、「死」を表す婉曲表現とは、検討対象の作品において著者が「死」を「行為」「過程」「状態」として表現するために用いるあらゆる言葉や表現を指す。ただし、その主要な条件は、それらの表現が「死」という単語を含まないことである。したがって、たとえ単語が直接「死」を意味していても、漢字「死」を含まない場合、それは「死」を表す婉曲表現とみなされ、本研究の対象となる。

本研究の目的は、日本古典文学における「死」の婉曲表現の進化を、『万葉集』から『源氏物語』の執筆時期まで追跡することである。この期間中にこれらの婉曲表現の使用方法や意味に変化が生じたかどうかを明らかにすることを目指している。このように、収集した例文の分析を通じて各婉曲表現の初発点と意味を特定した上で、各作品におけるその使用頻度を検討する。その上で、その普及の特徴について結論を導き出す。さらに、例文で発見された変化を比較することで、死を表す六つの婉曲表現それぞれの使用における内容的な特徴について結論を導き出す。

『万葉集』、『古今和歌集』、『源氏物語』おける「死」を表す婉曲表現を収集・分析した結果、全体で十五の主要な婉曲表現が抽出された。しかし、この比較的多い数にもかかわらず、これらの婉曲表現のうち、最初の歌集『万葉集』から『源氏物語』まで一貫して使用されているのは、その中で六種類に過ぎない。本研究では、この六種類の婉曲表現に焦点を当てる。残りの九種類は一つの作品でしか使用されず、後の作品では登場しない。

すべての収集した婉曲表現を分析した結果、各婉曲表現の形成方法に基づいて婉曲表現を分類し、三つの婉曲表現のカテゴリーを抽出した。第一のカテゴリーは、比喩的比較による婉曲表現の創造である。つまり、「死」という言葉の直接的な使用が、同様の比喩的イメージに置き換えられる場合である。あるいは、死の過程はより中立的なものに喩えられる。

自然現象に基づくこの婉曲表現群は、当時の人々の死の捉え方を反映している。それらは現実のプロセスを反映しているわけではないが、人間の死を環境で起きているプロセスになぞらえることで、何が起きているのかという理解を表現したのである。このような婉曲表現は、日常的な過程との類推によって生み出されるもので、象徴的な意味だけでなく、儀式的、宗教的な意味を持つこともある。結局のところ、第一のカテゴリーの婉曲表現は、比較のために物を使うことによって作り出される、高度なイメージによって特徴づけられると言える。たとえば、露や雪は、人生のはかなさや弱さを表すシンボルとしてよく使われた。また、当時の人々の間で比較の対象となった雲や煙は、魂が肉体を離れることとしばしば関連づけられた。

第二のカテゴリーは、既存の単語や表現に文脈上の意味を付加する方法である。この場合、比喩的な部分は存在せず、「死」という言葉の社会的に受け入れがたい直接的な使用を隠すことを意図して、既存の言葉に付加的な意味が与えられている。これらの単語は、文脈上の意味を追加されたとはいえ、元の意味の色合いを保っており、死の状況に応じて使われる。第一のカテゴリーとは対照的に、第二のカテゴリーの婉曲表現は、死の事実を示すだけでなく、登場人物の死に対する認識の特殊性を示したり、死の種類や登場人物の状態をより明確に描写したりするのに役立つことも多い。第二のカテゴリーに分類される婉曲表現は、あくまでもその言葉の主な意味に対する付加的な意味であるため、その使用を絞り込むのに役立つ。

第三のカテゴリーは、「死」という言葉と同義語と言える婉曲表現から構成されている。これらは本来の意味で用いられ、常に死を過程、行為、または状態として示すため、第二のカテゴリーの婉曲表現として分類することは困難である。しかし、第二のカテゴリーの婉曲表現と同様に、作者や主人公のこの出来事に対する態度を様々な形で表現している。

ただし、第三カテゴリーの婉曲表現は後期の作品で初めて使用されるようになったため本研究では第三のカテゴリーは今回は扱わず、第一、第二のカテゴリーのみ取り上げる。ただし、本研究の目的は、婉曲表現のそれぞれの特徴を、設定された期間、『万葉集』から『源氏物語』までにおける使用状況を追跡することで明らかにすることである。さらに、カテゴリー毎の特徴を考察することで、それぞれの特徴や関係についても解明することが可能となる。

本論文では、死を表す婉曲表現に注目し、その使用の変化と第一カテゴリーから第二カテゴリーへの移行過程を、『万葉集』・『古今和歌集』・『源氏物語』における用例を通じて考察する。第二節では、研究対象作品に見られる各婉曲表現の使用例を取り上げ、具体的な分析を行う。この検討を通じて、各婉曲表現の使用の変遷を追跡し、その特徴を明らかにする

とともに、カテゴリー間の移行がいかなる過程で生じたのかを解明することを目的とする。

二　「死」の婉曲表現の形成

二・一　隠る

「隠る」は、それが対になる対象によって形が変わるという特徴がある。さらに、時間の経過とともに、その形が変化し、比較対象を失って第二のカテゴリーに移行した。「隠る」という婉曲表現はよく使われていた。その使用例は『万葉集』まで遡ることができ『源氏物語』にも登場する。『万葉集』には「雲隠れ」という言葉がある。『万葉集』には「隠る」という語が一六四回出てくる。そのうち「雲に隠る」という表現は二四回使われている。しかし、この「雲に隠る」というフレーズの二四例のうち、婉曲的なものは六例しかなく、他の例は、実際の景色を表現しており、死の婉曲表現ではない。そのうち三首は皇族の血を引く故人、すなわち大津皇子、左大臣長屋王、弓削皇子を偲んで詠まれたものである。

具体的な用例の分析に入る前に、当時の天皇像がどのように理解されていたのかを示す歌を取り上げることとする。

日並皇子尊の殯宮の時に柿本朝臣人麻呂が作る歌一首

● （省略）天照らす　日女の命［一云ふ、「さしあがる　日女の尊」］天をば　知らしめすと　葦原の　瑞穂の国を　天地の　寄り合ひの極み　知らしめす　神の尊と　天雲の　八重かき別きて［一云ふ、「天雲の八重雲分けて」］神下しいませまつりし　高照らす　日の皇子は　飛ぶ鳥の　清御原の宮に　神ながら　太敷きまして　すめろきの　敷きます国と　天の原　岩戸を開き　神上り　上りいましぬ（**万葉集・巻第二・一六七**）

この歌から、天皇が太陽神の末裔として、讃えられ、人々から太陽の神として崇められていることがよくわかる。そして、彼の生涯を語る際、彼らはそれを循環的なものとして描いている。具体的には、天皇は天界で統治し、その後生まれ落ちて地上に降りてきて国を統治し、再び天界に昇って臣下の前から姿を隠したのである。この歌から、人々が天皇を天から降臨した存在とみなし、死後には再び天に昇ると考えていたことが明らかとなる。それに伴い、天皇は天との強い結びつきを示していた。そのため、皇族の死を描写する際、婉曲表現「雲に隠る」を使用することは不思議ではない。なぜなら、人々の視点からすると、太陽神の末裔である天皇は、地上での生涯を終え、天界に昇り、雲の向こうに隠れてしまったからである。

ただし、この特徴にもかかわらず、この婉曲表現は皇族以外に対しても適用される。しかし、ほとんどの場合では比較の対象が異なる。表から明らかなように、表現「雲に隠る」が皇族以外の者に対して用いられるのは、たった一つの用例

表１　「隠る」の婉曲表現の使用例

作品	用例	対象	誰に対して
万葉集・巻第二・二〇五	弓削皇子の薨ぜし時に、置始東人作る歌一首　　反歌一首　　置始東人 大君は神にしませば天雲の五百重が下に隠りたまひぬ	雲	弓削皇子
万葉集・巻第三・四一六	百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ	雲	大津皇子
万葉集・巻第三・四四一	大君の命恐み大殯の時にはあらねど雲隠ります	雲	左大臣長屋王
万葉集・巻第三・四六一	留め得ぬ 命にしあれば しきたへの 家ゆは出でて 雲隠りにき	雲	尼理願
万葉集・巻第三・四六〇	七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願の死去しことを悲嘆して作る歌 （省略）草枕　旅なる間に　佐保川を　朝川渡り　春日野を　そがひに見つつ　あしひきの山辺をさして　夕闇と隠りましぬれ	夕闇	尼理願
万葉集・巻第二・二〇七	天飛ぶや 軽の道は 我妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけどやまず行かば 人目を多み 数多く行かば 人知りぬべみ さね葛 後も逢はむと 大船の 思ひ頼みて 玉かぎる 岩垣淵の 隠りのみ 恋ひつつあるに渡る日の 暮れぬるがごと 照る月の 雲隠るごと 沖つ藻の 靡きし妹は黄葉の過ぎて去にきと 玉梓の 使の言へば 梓弓 音に聞きて（省略）	月	妻
万葉集・巻第三・四六六	（省略）春の葉の 茂きがごとく 思へりし 妹にはあれど 頼めりし子らにはあれど 世間を 背きしえねば かぎるひの燃ゆる荒野に 白栲の天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす 隠りにしかば 我妹子が形見に置ける（省略）	入日なす	妻
万葉集・巻第二・一六九	あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも	月	日並皇子尊
万葉集・巻第三・四七一	悲緒未だ息まず、更に作る歌五首 大伴家持 家離りいます我妹を留めかね山隠しつれ心どもなし	山	妻

だけである。四六一番だけが、尼理願を称えて詠まれたものであるが、彼女についてはほとんど知られていない。しかし、大伴家持が詠んだ四六〇番の歌から、彼女が新羅から来た尼僧であることがわかる。この歌にも、四六一番の歌と同じような死の婉曲表現がある。ただし、雲の代わりに山や闇が使われている。一方、妻の死について言及する場合、詠者は月などの他の天体への言及を好む傾向にある。故人が隠されている場所だけでなく、時には故人の姿が比較の対象となり、婉曲表現を補完することもある。このように、単に「雲に隠る」のではなく、「入日・月が隠る」こともある。婉曲表現の使用におけるさらなる変化をよりよく理解するために、次に引用するのは『古今和歌集』の「隠る」の例である。

深草の帝の御国忌の日、よめる　文屋康秀

● 草深き霞の谷に影かくし照る日のくれし今日にやはあらぬ（**古今和歌集・哀傷歌・八四六**）

文屋康秀が仁明天皇の命日に際して八四六番の歌で使ったものである。このように、皇室との関係で婉曲表現が使われ続けてきたことをたどることができる。また、天皇の死を「隠れた太陽」に例える傾向も続く。『古今和歌集』では一つの用例しか見つからなかった。皇帝の死を回想するなかで、詠者はその死を、まるで暗闇に包まれた世界のようだと表現している。さらに、『古今和歌集全評釈』の解釈によると、「照る日」という表現は皇帝を象徴し、その「影」とは太陽の光を指す。したがって、天皇の死によって、輝く太陽の光が失われ、かつて照らしていた世界が暗闇に沈んだようなものである。[4]

上記のすべての対象は、自然界で起こる自然のサイクルの一部である。つまり、親しい人や大切な人の死を、隠れた月や沈んだ太陽に例えることで、作者たちは死を詩的に表現しただけでなく、生命と死の自然のサイクルを暗示していたと結論付けることができる。

次に『源氏物語』の用例に移る。『源氏物語』では七例が見つかった。七例中六例は、比較部分を含まないため、第二のカテゴリーに属する。唯一の例外として、「匂兵部卿」の巻における光源氏の死に関する記述を見いだすことができる。

● 光隠れたまひにし後、かの御影に立ちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。（**匂兵部卿・⑤・一七**）

『源氏物語』の例を挙げれば、「隠る」という婉曲表現が、その本来の形態を失い、変容して第二の婉曲表現のカテゴリーに移行する過程を観察することができる。「匂兵部卿」の巻で源氏の死について、比喩的な意味で使われている。この巻は「光隠れたまひにし後」というフレーズで始まる。源氏にいつも寄り添っていた光が、源氏の死とともに消えてしまったことを表していると考えられよう。作中には、源氏がいつどのように死んだかについての情報はない。これが彼の

死についての最初の言及である。『古今和歌集』の例を参考に、また『源氏物語』の主人公が皇族の血を引く人物である点を考慮すると、彼の死を「光隠れたまひにし後」と表現することは、皇族の死に関するこの婉曲表現の傾向から見て、極めて論理的である。同時に、源氏が光る君というあだ名を持っていたため、この言葉を使用した可能性は十分にある。次にあげる朝顔巻では、「光」を省略した「隠る」が使われている。

● 「院崩（かく）れたまひて後は、さまざまにつけて、同じ世のやうにもはべらず、おぼえぬ罪に当たりはべりて、知らぬ世にまどひはべりしを、たまたま朝廷に数まへられたてまつりては、またとり乱り暇なくなどして、年ごろも、参りていにしへの御物語をだに聞こえうけたまはらぬを、いぶせく思ひたまへわたりつつなむ」など聞こえたまふを（省略）（**朝顔・②・四七〇**）

その場合、なぜ「朝顔」の巻で、作者が比喩の対象を省略した短い形式の「隠る」という婉曲表現を使用したのかが理解できる。皇族である「院」に対して「光」が「隠る」と表現されないのは、「光」が光源氏を象徴する言葉だからである。さらに、発見された「隠る」という婉曲表現の用例は、『源氏物語』において「匂兵部卿」巻を除き、すべて比較対象を伴わずに用いられている。このことから、『源氏物語』においては「隠る」が第二カテゴリーへと移行したと結論づけられる。一方、「匂兵部卿」巻に見られる例のみが、比較対象を伴っており、第一カテゴリーに属する用例として位置づけられる。

『万葉集』でこの婉曲表現が主に使われたのは、「雲隠れ」という形である。また、この婉曲表現が使われた六例のうち、半数は皇族の死について使われている。しかし、この比較対象以外にも、「闇に隠る」、「山陰に隠る」などで死を例えたものが収録されている。ほとんどの場合、見つかった婉曲表現は第一のカテゴリーに属する。しかし、第二のカテゴリーに属する婉曲表現が使われている例も見つかった。『古今和歌集』では一つの用例しか見つからなかった。また、天皇の死を「隠れた太陽」に例える傾向もある。次に、『源氏物語』では七例が見つかった。比較部分を含まないため、第二のカテゴリーに属する。また、皇族の死を婉曲に表現する傾向が続いている。

二．二　消（く／きゆ）

もう一つの「死」を表す第一のカテゴリーの婉曲表現は「消（く／きゆ）」である。「消（く／きゆ）」の婉曲表現は、『万葉集』までさかのぼる。それ以前の使用例は見つかっていない。この歌集で比較の対象となるのは露だけである。「露のように消える」というフレーズが登場する二四の歌の例のうち、死を婉曲的に表現する歌は五つしかない。

また家持が作る歌一首　　大伴家持

● 我がやどに 花ぞ咲きたる そを見れど 心もゆかず はしきやし 妹がありせば 水鴨なす ふたり並び居 手折りても 見せましものを うつせみの 借れる身なれば 露霜の 消ぬるがごとく あしひきの 山道をさして 入日なす 隠りにしかば そこ思ふに 胸こそ痛き 言ひもえず 名づけも知らず 跡もなき 世間にあれば 為むすべもなし **（万葉集・巻第三・四六六）**

四六六番の歌では、大伴家持が妻の死について詠んでいる。この歌の中で作者は、露の短さに言及し、死を消えてしまう露に例えている。大伴家持は、妻の死を「消えゆく露」に例えて婉曲に表現することで、妻の死が早すぎたことを示している。

挽歌一首　　大伴家持

● （省略）咲く花も 時にうつろふ うつせみも 常なくありけり たらちねの 御母の命 なにしかも 時しはあらむを まそ鏡 見れども飽かず 玉の緒の 惜しき盛りに 立つ霧の 失せぬるごとく 置く露の 消ぬるがごとく 玉藻なす 靡き臥い伏し 行く水の 留めかねつと 狂言か 人の言ひつる 逆言か 人の告げつる 梓弓 爪引く夜音の 遠音にも 聞けば悲しみ にはたづみ 流るる涙 留めかねつも **（万葉集・巻第一九・四二一四）**

この大伴家持の四二一四番の歌では、天皇の命で家を離れているときに、愛する人の訃報を受け、その人を失ったことを詠んでいる。この歌では、歌人はこの婉曲表現を使って、人の命が一瞬にして失われてしまうことを強調している。『万葉集』で「消（く／きゆ）」の婉曲表現が「露」との比較表現においてのみ見出され、「露のように消える」という形でのみ存在することがわかった。そして、死を表す婉曲表現としては、「露のように消える」という全集にある表現の使用例のうち、わずか5分の1しか占めていない。

次に『古今和歌集』に移る。『古今和歌集』では、「露のように消える」という婉曲表現が使われる用例は三首しかない。しかし「露のように消える」という表現自体が『古今集』全体で四例しかないから、定型化してきている可能性が指摘できる。

題知らず　　読人しらず

● 唐衣たつ日はきかじ朝露の置きてしゆけは消ぬべきものを **（古今和歌集・離別歌・三七五）**

この歌は、ある人司を賜はりて、新しき妻につきて、年経て住みける人を捨てて、ただ「明日なむ立つ」とばかり言へりける時に、ともかうも言はで、よみてつかはしける

三七五番の歌は、夫が他国へ出張するという知らせを受けた妻が、別の女性を連れて行ったときのことを書いたものである。この状況に耐えきれなくなった女は、死んでしまいそうな気持ちを「露のように消える」という婉曲的な言葉で表

している。この歌では、夫からの知らせにショックを受けた作者が、死にたいという気持ちを婉曲に表現している。一般に、『古今和歌集』には「死」という言葉を直接的に使って、死にたいという願望を表現した例が見られる。しかし、「露のように消える」という婉曲な表現を用いることで、歌人は露のように永遠に、そして速やかにこの世から消え去りたいという願望を表しているのであろう。

題しらず　　読人知らず

● 奥山の管のねしのぎふる雪のけぬとかいはむこひのしげきに（**古今和歌集・恋歌一・五五一**）

題しらず　　とものり

● 水の泡の消えでうき身といひながら流れてなほも頼まるるかな（**古今和歌集・恋歌五・七九二**）

さらに、『古今和歌集』に「露のように消える」だけではなく、「雪のように消える」と「泡のように消える」という表現もある。「雪のように消える」という表現が、歌集中に二例ある。同じく、「泡のように消える」という表現が、歌集中にも二例ある。「泡のように消える」を死の婉曲表現として使うのは、死にたいという願望を表現した紀友則の歌にある。両歌集に見られる例はすべて第一のカテゴリーに属する。

『古今和歌集』では、「消（く／きゆ）」という婉曲表現の使用例が全体的に増加している。さらに、「露のように消える」という表現が死を表す婉曲表現として使用された例と、この歌集に見られる「露のように消える」という表現の総例数を比較すると、『万葉集』の時代からこの表現の使用頻度が高まり、死とより強く関連付けられるようになったと結論づけられる。また、比較の対象も増えている。『万葉集』では「露」とのみ比較されていたが、『古今和歌集』では「雪」や「泡」とも比較されるようになった。

『古今和歌集』では、「露のように消える」という表現が三例確認されるにすぎないが、全集における総数四例中の三例であることから、表現の定型化が進みつつあることが指摘できる。加えて、「雪のように消える」「泡のように消える」といった新たな比較対象が導入され、表現が多様化する傾向も見られる。特に「泡のように消える」は紀友則の作例において「死にたい」という願望表現に結びつけられており、死を婉曲に語る一類型として機能している。

以上を踏まえると、『万葉集』における「消（く／きゆ）」は未だ限定的な用法にとどまるのに対し、『古今和歌集』に至っては「露」を中心とした表現の定型化が進むとともに、「雪」「泡」といった新たな比喩を取り込み、多様化の段階に入りつつあると結論づけられる。

続いて『源氏物語』を考察する。源氏物語では「消（く／きゆ）」という死の婉曲表現は八例見える。この婉曲表現はまだ使われているが、露や雪との比較という形で比喩的な部

分を失い、単純な動詞の形で残っていることもある。したがって、『源氏物語』では、この婉曲表現はすでに、婉曲表現を作り出すもう一つの方法、すなわち、既存の言葉に付加的な意味を与えるという第二のカテゴリーに属している。初めて婉曲表現が比較比喩部分を伴わずに使われ、第二のカテゴリーに移行している。見つかった用例のうち、五例が第二カテゴリーに属している。さらに、「隠る」の婉曲表現とは異なり、『源氏物語』における「消（く／きゆ）」は、以前の歌集で用いられていた形態を保持しつつ、消滅することなく定型化が進み、加えて新たな比較対象を取り入れることで表現を拡張していることが明らかである。実際に、八つの用例のうち五つは、比較の対象を失ったにもかかわらず、第二のカテゴリーに属する事例として確認される。すなわち、この婉曲表現は第一のカテゴリーから第二のカテゴリーへの移行過程を示すとともに、形態の維持と発展が同時に進行していることが明らかである。

さらに、第二のカテゴリーに移行したことで、婉曲表現は形態を変えたという事実も指摘できる。『源氏物語』では「消（く／きゆ）」は「消え入る」の形で用いられるのが圧倒的多数である。作品中で初めて登場するのは「桐壺」の巻である。

● いとにほひやかにうつくしげなる人の、いたう面痩せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でても聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを御覧ずるに、来し方行く末思し召されず、よろづのことを泣く泣く契りのたまはすれど、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよとわれかの気色にて臥したれば、いかさまにと思し召しまどはる。（**桐壺・①・二二**）

すでに衰弱して死期が迫っていた桐壺更衣が、桐壺帝と最後の時を過ごす場面である。比喩的な部分を失い、第二のカテゴリーの婉曲表現として使われている。この場合、人物が死につつあることを言うために、先に取り上げた作品のように比較対象は用いない。むしろ、このような形で婉曲表現を使うことで、作者は登場人物が徐々に死んでいく過程を示すことができる。

これ以外の婉曲表現については、比較対象として、先に取り上げた作品に見られた露や雪だけでなく、灯火も使われている。

● （省略）など聞こえたまふほどに、灯火などの消え入るやうにてはてたまひぬれば、いふかひなく悲しきことを思し嘆く。（**薄雲・②・四四七**）

「薄雲」の巻では、源氏が瀕死の状態にある藤壺中宮を見舞ったとき、中宮が亡くなり、その死は灯火が消えることに例えられる。藤壺中宮の死を消えゆく炎に例え、紫式部は、しばらく苦しく弱り切っていた中宮が、一瞬にして消える灯火のように亡くなったと指摘する。他の例が第二カテゴリー

に属しているのに対し、この場合は第一カテゴリーに分類される。その理由として考えられるのは、紫式部が藤壺中宮の死の描写に追加的な細部や感情的なニュアンスを付加しようとした意図であろう。藤壺中宮の死は瞬時で捉えどころがなく、言葉で表現することさえ困難であった。ここで婉曲表現「消え入る火のように」を用いることにより、作者はヒロインの死の瞬間性を強調している。すなわち、彼女は一瞬のうちに、まるで吹き消された火のように消え去ったのである。

「消（く／きゆ）」の婉曲表現は、『万葉集』までさかのぼる。それ以前の使用例は見つかっていない。この歌集で比較の対象となるのは露だけである。「露のように消える」というフレーズが登場する二四の歌の例のうち、死を婉曲的に表現する歌は六つしかない。

『古今和歌集』では、「露のように消える」という婉曲表現が使われる用例は三つしかない。しかし同時に、「露のように消える」という表現が『古今和歌集』のなかに四例しかない。このように、この表現の婉曲的な意味が時代とともに変化していることがわかる。さらに、「露のように消える」という表現に類似する、「雪のように消える」表現が、歌集中に三例ある。歌集に見られるもうひとつのオブジェは「泡」である。この物体を死の婉曲表現の一部として使うのは、死にたいという願望を表現した紀友則の歌ならではのものだった。両歌集に見られる例はすべて第一のカテゴリーに属する。

『源氏物語』では八つの用例が見つかった。初めて婉曲表現が比較比喩部分を伴わずに使われ、第二のカテゴリーに移行している。見つかった用例のうち、五例が第二カテゴリーに属している。残りの婉曲表現については、比較対象として、先に取り上げた作品に見られた露や雪だけでなく、灯火も使われている。

以上の事実を整理すると、「消（く／きゆ）」の婉曲表現は時代とともに大きな変化を遂げていることがわかる。すなわち、『万葉集』においては「露のように消える」という表現が必ずしも死を意味するわけではなく、全体の約四分の一にあたる歌でのみ死の婉曲表現として用いられていた。これに対し、『古今和歌集』では同じ表現がほぼ死の婉曲表現として機能するようになり、その意味が限定され、定型化が進んだといえる。『万葉集』では「露」のみが比較対象であったのに対し、『古今和歌集』では「雪」や「泡」も用いられるようになった。そして『源氏物語』に至ると、この表現はさらに発展し、比喩対象を伴わずに単独で「死」を意味する第二カテゴリーの用例が見られるようになる。

二．三　絶ゆ

『日本国語大辞典』によれば「絶ゆ」というのは「一続きのものが途中で切れる。続いていたものが切れて続かなくなる。とぎれる。」ということである。「絶ゆ」が使われた最も

古い例は、『万葉集』まで遡ることができる。まず、『万葉集』における最初の用例を確認する。

男子名を古日といふに恋ふる歌三首

● （省略）横しま風の にふふかに 覆ひ来れば せむすべの たどきを知らに 白たへの たすきを掛け まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神 仰ぎ祈ひ祷み 国つ神 伏して額つき かからずも かかりも 神のまにまにと 立ちあざり 我乞ひ祷めど しましくも 良けくはなしに やくやくに かたちつくほり 朝な朝な 言ふこと止み たまきはる 命絶えぬれ 立ち躍り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持てる 我が子飛ばしつ 世間の道 （**万葉集・巻第五・九〇四**）

『万葉集』に見られるこの用例から、「絶ゆ」が死の婉曲表現として用いられるには、「命」といった名詞が含まれていなければならないことがわかる。息子に捧げられた九〇四番の歌では、作者は息子の性格、病気、死について述べながら、「絶える」に「命」を加えて、息子の命は病気で絶たれたと表現している。この場合の比較対象は、「隠る」の婉曲表現に見られるような強い比喩性を伴うものではないが、死は単なる動詞としてではなく「命が絶ゆ」という形で表現されている。したがって、この用例は第一カテゴリーに分類できる。続いて、『古今和歌集』の用例を取り上げ、その特徴を考察する。

題しらず　読人しらず

● 水無瀬河ありてゆく水なくはこそつひにわが身をたえぬと思はめ （**古今和歌集・恋歌五・七九三**）

『古今和歌集』の例を見ても、『万葉集』に見られる婉曲の構造が続いている。こうして、七九三番の歌では、希望がなければ自分も肉体を失う、つまり死んでしまう、と言っている。この例では、「身をたえぬ」という比較対象を伴っているため、『古今和歌集』における「死」の婉曲表現の用例としては依然として第一カテゴリーに位置づけられる。ここでは、『源氏物語』における婉曲表現の使用上の変化を取り上げる。

● 御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜半うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。（**桐壺・①・二三**）

最後に、『源氏物語』には三例見られる。いずれも源氏にとって重要な女性、母・夕顔と妻である葵の上の死について使われている。例えば、桐壺更衣の場合、彼女の死は帝に報告された。この作品では、婉曲表現が比較対象なしに使用されており、このことから第二カテゴリーへの移行が認められる。

この婉曲表現が使われるようになったのは『万葉集』から

で、「絶ゆ」という言葉と名詞の「命」が組み合わさって、死を意味する婉曲表現となった。『古今和歌集』では、婉曲表現の構造的特徴は継承されている。「絶ゆ」という言葉と名詞の「身」が組み合わさって、死を意味する婉曲表現となった。これにより、『万葉集』と『古今和歌集』においてこの婉曲表現は第一カテゴリーに分類された。そして最後に、『源氏物語』では、これ以前の作品に比べて用例が増える。比較の対象を失い、すべての使用例は第二のカテゴリーに移動する。

二．四　亡くなる・亡す・亡し

「なくなる／うす」という単語が「死」を意味する婉曲表現であるかどうかについては、最も疑問が残る質問であろう。現代の日本語では「なくなる／うす」という動詞は「死」の同義語として認識されている。しかし、次の理由から、「なくなる／うす」は死の婉曲表現としての基準をすべて満たしており、検討対象となる。

第一に、本研究の冒頭で示した婉曲表現の定義に従えば、「死」を表す婉曲表現とは、「死ぬ（しぬ）」という単語を使わずにその意味を表現する言葉や表現を指すため、それらはいずれも「死」を表す婉曲表現とみなされる。さらに、第二のカテゴリーに属する婉曲表現の定義に従うと、既存の単語に追加的または文脈的な意味を与えることで形成された婉曲表現が第二のカテゴリーに属するものであるため、この婉曲表現の発生過程も追跡可能である。『日本国語大辞典』によると、「亡くなる」という単語は「無く為す」という表現と密接に関連している。辞書に「ないようにする。失う。なくす。亡失する。」と「死なれることによって人を失う。なくす。」という単語の意味を見ても、現代日本語では「うす」は「死ぬ」のより丁寧な同義語として認識されているものの、その意味合いは異なることがわかる。動詞「亡くす」は「死ぬ」という意味であるが、「死によって失う」という意味合いがある。

この婉曲表現は、間違いなく最もよく使われているものと言える。『万葉集』には五例、『古今和歌集』には一例、『源氏物語』では二〇〇例を超える使用例が確認できる。以下、『万葉集』から検討する。

和銅四年辛亥、河辺宮人が姫島の松原に美人の屍を見て、愛慟して作る

● 風早の美保の浦廻の白つつじ見れどもさぶしなき人思へば　**（万葉集・巻第三・四三四）**

使用の特徴について言えば、両方の歌集において、婉曲表現は「なき人」という形でのみ見られる。『万葉集』でも『古今和歌集』でも、この婉曲表現は、亡くなった人々を偲ぶ歌で使用されている。両方の歌集で、この婉曲表現を使用することで、作者は、永遠に去った人々に関して悲しみを表現し

ている。この婉曲表現は必ずしも作者にとって身近な人物に対して使用されるわけではない。例えば、『万葉集』の四三四番の歌は、旅の途中で亡くなった美しい女性への追悼の歌である。しかし、ほとんどの歌では、作者と故人との親密さが示されている。次に、『古今和歌集』の用例に移る。

題しらず　　読人しらず

● なき人の屋戸に通はば郭公かけて音にのみ鳴くと告げなむ　（**古今和歌集・哀傷歌・八五五**）

『古今和歌集』の八五五番の番では、歌が誰に捧げられたのかは不明であるが、内容からすると、作者がホトトギスに、可能であれば、亡くなった人へ、この世にまだ彼を悼む人々が存在することを伝えてほしいと願っていることがわかる。これにより、少なくとも知り合いの人物について言及されていることが推察される。

● 亡き御影どもも、我をばいかにこよなきあはつけさと見たまふらむ　（**宿木・⑤・三八四**）

『源氏物語』では、婉曲表現「亡」の使用状況が変化している。まず、前回の「なき人」に「うせる」という語句が追加され、さらに「亡きあと」という語句も加わっている。二〇一の例から、作品中に約四五の「ウセタマフ／ナク＋人」という形の婉曲表現の使用例が見つかり、そのうち四三は「亡き人」という形である。さらに一一の例は「亡き影」という形である。しかし、形が変わっても、婉曲表現の意味は変わっていない。それは、亡くなった人々を指すために、同じように使われている。したがって、この婉曲表現は、使用の観点から最も中立的なものの一つとみなすことができる。全体として特別な意味のニュアンスも含んでいない。さらに、後期の『源氏物語』における形式の変化にもかかわらず、使用の特徴に大きな変化は生じていない。

二．五　過ぐ

文学作品で最も広く使われている死の婉曲表現に「過ぐ」がある。『日本国語大辞典』は「過ぐ」を「人、物、時などが近づいて来て、または、そこを通って、向こうへ去って行く。」と説明している。「過ぐ」が使われた最も古い例は、『万葉集』まで遡ることができる。全部で一三の例が見つかった。本作における用例の大部分は、「過ぎにし人」という形で現れている。巻第一の四七番の歌から始まって、用例は集全体を通じてほぼ均等に分布している。

軽皇子、安騎の野に宿らせる時に柿本朝臣人麻呂が作る歌

● ま草刈る荒野にはあれどもみちの過ぎにし君が形見とぞ来し（**万葉集・巻第一・四七**）

四七番の歌は、柿本人麻呂が四五番の歌に対して詠んだ四首の返歌のうちの一首である。軽皇子とともに安騎の野にいるとき、作者は軽皇子の亡き父、草壁皇子を偲びに来たと述

べている。この歌では、「過ぎにし君」は故人である草壁皇子のことを指しており、作者は「過ぐ」という婉曲表現を使って、感情的な意味や文脈的な意味を追加していない。つまり、故人を中立的に言及するだけで、死の特異性やそれに対する態度については言及しない。重要なのは、故人がかつてこの場所を訪れていたということだけである。

所に就きて思ひを発す　　柿本人麻呂

● 児らが手を巻向山は常にあれど過ぎにし人に行きまかめやも（**万葉集・巻第七・一二六八**）

柿本人麻呂が詠んだ一二六八番の歌にもこの「過ぐ」の婉曲表現が含まれている。歌の中で柿本人麻呂は、過去に存在し未来にも存在する、つまり永遠である巻向山と対照的に、親しい死者を抱くことができないことについて書いている。次に、この婉曲表現が『万葉集』の後に見られるようになる、すなわち『源氏物語』を分析する。

● （省略）そのほどに思し定めたなりと伝てにも聞く、みづから御気色をも見れど、心の中には、なほ飽かず過ぎたまひにし人の悲しさのみ忘るべき世なくおぼゆれば、うたて、かく契り深くものしたまひける人の、などてかはさすがに疎くては過ぎにけむと心得がたく思ひ出でらる。（**宿木・⑤・三八二**）

『源氏物語』で用例数も『万葉集』の二倍に増えた。発見された用例を分析した結果、ほとんどの場合、「過ぐ」という婉曲表現が亡くなった人を指して使われていることが明らかになった。『源氏物語』では、この意味で約二五回登場する。最も多いのは、亡くなった大君についての用例である。亡くなった大君に言及した六例のうち、四例は「宿木」の巻に見られる。例えば、前掲の引用のなかで、二回使われている。しかし、同時に亡き大君のことにも触れており、ここで初めて婉曲表現が使われている。次に「早蕨」の巻の例に移る。

● 過ぎにしが恋しきことも忘れねど今日はたまづもゆく心かな」（**早蕨・⑤・三六三**）

また、「早蕨」の巻の婉曲表現の使用例は、これは和歌で用いられた例である。侍女たちの説得で匂宮の家に移ることを承諾した中の君は、夕方が近づいているにもかかわらず、やはり家を出て、世を去ることを決めた弁の尼と別れることができなかった。そこで女房たちは歌を詠み始めた。そのうちの一首は、女房が忘れられない亡き大君に捧げられたものであった。

しかし、特定の人物ではなく、死者全体に関連して使われた例もある。

● いと、かからぬほどのことにてだに、過ぎにし人の跡と見るはあはれなるを、ましていとどかきくらし、それとも見分かれぬまで、降りおつる御涙の水茎に流れそふを、人もあまり心弱しと見たてまつるべきがかたはらいたうはしたなければ、押しやりたまひて（**幻・**

④・五四七）

例えば、「幻」の巻では、この婉曲表現は特定の人物を指すことなく、すべての死者を指す一般的な意味で使われている。

● 「宮に渡したてまつらむとはべるめるを、故姫君のいと情けなくうきものに思ひきこえたまへりしに、いとむげに児ならぬ齢の、またはかばかしう人のおもむけをも見知りたまはず、中空なる御ほどにて、あまたものしたまふなる中の侮らはしき人にてや交じりたまはんなど、過ぎたまひぬるも、世とともに思し嘆きつること、しるきこと多くはべるに、かくかたじけなきなげの御言の葉は、後の御心もたどりきこえさせず、いとうれしう思ひたまへられぬべきをりふしにはべりながら、すこしもなぞらひなるさまにものしたまはず、御年よりも若びてならひたまへれば、いとかたはらいたくはべる」と聞こゆ。（**若紫**・①・二四一）

「過ぐ」が使われるもう一つの側面について言えば、死という事実を状態ではなく、亡くなるプロセスとして示すということである。例えば、「若紫」の巻で先に亡くなった尼僧との関係で使われた。その尼僧は死後、紫をどこに連れて行こうかと考えていたとき、父である兵部卿宮の家に連れて行くことに反対した。尼は、まだ生活の知恵も身についていない幼い子供が、母が亡くなった場所で暮らすのは良くないと考えたのである。

最も古い用例は『万葉集』に見られる。全ての用例は第二のカテゴリーに入る。先に述べた特殊な使用状況を考慮に入れても、この婉曲表現はすでに起こった死を指す場合にのみ使われる。『源氏物語』では、用例が顕著に多い。『万葉集』と異なる特殊な用法はない。三つの歌を除けば、他の例はすべて散文で使われている。前述の婉曲表現「亡くなる・亡す・亡し」と同様に、この婉曲表現も第二カテゴリーに属する。さらに、その使用は状況に左右されることなく、その使用特性に不変性が見られる。

二．六　別る

『日本国語大辞典』によれば「別る」というのは「一つのものが別々になる。分離する。また、区分される。」ということである。「別る」という言葉が死の婉曲表現に属するかどうかを判断する際に問題となるのは、多くの場合死の文脈で使われるにもかかわらず、実際には「死」ではなく、残された人々の心情について使われているという点である。第二カテゴリーに属するこの婉曲表現は、時代を通じてその使用に大きな変化を示さない。

● わたつみの　恐き道を　安けくも　なく悩み来て　今だにも　喪なく行かむと　壱岐の海人の　ほつての占部を　肩焼きて　行かむとするに　夢のごと　道の空路に　別れす

る君　（**万葉集・巻第一五・三六九四**）

弟の死にける哀しびて作る歌一首　田辺福麻呂

● 父母が 成しのまにまに 箸向ふ 弟の命は 朝露の 消やすき命 神のむた 争ひかねて 葦原の 瑞穂の国に 家なみか また帰り来ぬ 遠つ国 黄泉の界に 延ふ蔦の 己が向き向き 天雲の 別れし行けば 闇夜なす 思ひ惑はひ 射ゆ鹿の 心を痛み 葦垣の 思ひ乱れて 春鳥の 音のみ泣きつつ あぢさはふ 夜昼知らず かぎろひの 心燃えつつ 嘆く別れを　（**万葉集・巻第九・一八〇四**）

たとえば、『万葉集』では、死の文脈で「別る」という言葉が使われた五つの例のうち、死を婉曲に表現したものと考えられるのは二つだけである。三六九四番の歌では、家族を捨てた人の死を指している。あるいは、弟の死に言及した一八〇四番の歌では、弟が死んだことは事実として述べている。このように、「死」という言葉の代わりに「別る」という婉曲表現を使うことで、歌人は死が親しい人との別れの理由であることを示したいのである。

『万葉集』における「別る」は、死の婉曲表現として用いられるものの、実際には死そのものよりも、残された者との別れや悲しみを示す場合が多い。第二カテゴリーに属し、比較対象と結びつけて用いられることはない。次に、『古今和歌集』を見ていく。

藤原高経の朝臣の身まかりての又の年の夏、郭公の鳴きけるを聞きてよめる　**つらゆき**

● 郭公　今朝鳴く声に　おどろけば　君に別れし　時にぞありける（**古今和歌集・哀傷歌・八四九**）

男の、人の国にまかれりける間に、女、にはかに病をしていと弱くなりにける時、よみおきて身まかりにける　**読人しらず**

● 声をだに　聞かで別るる魂よりも　なき床に寝む　君ぞかなしき（**古今和歌集・哀傷歌・八五八**）

まず、藤原高経が亡くなった翌年の夏に詠まれた八四九番歌での使用が見られる。しかし、この歌から明らかなように、作者は死による別離と会うことの不可能性に言及しているものの、死を指し示しているのではなく、作者の心情を強調しているのである。対照的に、妻が生前に夫に宛てて書いた歌八五八では、死にゆく女性が、死による別離について言う。

業平朝臣の母の皇女、長岡にすみ侍りける時に、業平宮仕へすとて時時もえまかりとぶらはず侍りければ、師走ばかりに母の皇女のもとより、「とみのこ」とて文を持てまうてきたり。あけて見れば、詞はなくてありける歌

● 老いぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君かな　（**古今和歌集・雑歌上・九〇〇**）

九〇〇番の歌は、前の八五八番の歌と内容が似ている。九

○○番の歌では、年老いた母親が、自分の死によって永遠の別れを余儀なくされる時が間もなく来ることを予感し、息子に会うためにこの歌を詠んでいる。同じ歌は『伊勢物語』の八四段にも登場する。

全体として、『古今和歌集』における使用特性に顕著な変化は見られない。婉曲表現は比較対象と結びつけられることなく、引き続き第二カテゴリーに属している。

● さるは、この世の別れ、避りがたきことはいと多うなむ。親にも仕うまつりさして、今さらに御心どもを悩まし、君に仕うまつることも半ばのほどにて、身を顧みる方、はた、ましてはかばかしからぬ恨みをとどめつる、おほかたの嘆きをば、さるものにて（省略）（**柏木・④・三一五**）

『源氏物語』には、死によって引き起こされた離婚に対する生者の感情を指す言葉として使われる。実際に死の婉曲表現が含まれていると考えられる例はごくわずかである。例えば、「柏木」の巻では、柏木が夕霧と話しているときに、この世を去りたいが、両親への罪悪感がそれを止めると言う。

一般的に、この婉曲表現は時代やジャンルによって使われ方が変化していると言える。上記の例はすべて、この婉曲表現が第二のカテゴリーに属することを示している。また、「別る」という婉曲表現の意味は、『万葉集』に初めて登場してから『源氏物語』まで意味的に変わっていない。

総じて、この婉曲表現の用例からも明らかなように、第二カテゴリーに属する表現は時間の経過に伴う使用法の変化が少なく、その意味はほとんど変わらずに定着している。また、この婉曲表現や、第二カテゴリーにのみ属する他の表現の分析からも示されるように、カテゴリー間の移行は原則として第一カテゴリーから第二カテゴリーへの場合に限られることが分かる。

三　おわりに

本研究では、日本古典文学における「死」を表す婉曲表現の進化について、最古の歌集『万葉集』から『源氏物語』に至るまで分析した。これにより、文学作品における婉曲表現の使用がどのように進化し定着したか、その形態が変化し、場合によっては死を表す婉曲表現のカテゴリーや意味が、異なる歴史的時期に応じて変化したかが明らかになった。

第一カテゴリーの婉曲表現は、「死」を表す婉曲表現の比喩的な比較の基盤となるイメージを広く使用するという特徴がある。ある比較の対象が他の対象に置き換えられる場合があり、前の対象をかき消すように次の対象が現れる例として「隠る」の婉曲表現が挙げられる。また、すべての対象に重なるように現れる例として「消（く／きゆ）」の婉曲表現が挙げられる。しかし、同時に、このカテゴリーの婉曲表現が別のカテゴリーに移行する可能性はあるものの、本研究で検

討した婉曲表現の例から、多様な発展のパターンが見られる。例えば、「隠る」という婉曲表現は、当初から多くの比較対象を含んでいたが、『古今和歌集』ではその使用例が一つに減少している。また、『源氏物語』では、第一のカテゴリー婉曲表現として「隠る」の例が存在しない。このように、この婉曲表現は、比較部分を失って、完全に第二のカテゴリーへの移行を完了した。

一方、「消（く／きゆ）」という婉曲表現の例では、第一カテゴリーの婉曲表現の使用の別の進化のパターンを見ることができる。この婉曲表現は、分析から明らかになったように、比較対象の数が減少するどころか、逆に増加した。『万葉集』の「露」に『古今和歌集』では「雪」と「泡」が加わり、「源氏物語」では「雪」が引き続き使用され、さらに作品自体に「火」という新たな対象が加わっている。さらに特徴的なのは、この婉曲表現が『源氏物語』が書かれた時点でも、二つの形態で引き続き使用されていたことである。つまり、第二のカテゴリーに移行したにもかかわらず、同時に第一のカテゴリーの婉曲表現としても引き続き使用されていたのである。

第一のカテゴリーの婉曲表現がより一般的、あるいは叙述的であり、死の詳細を描写するのではなく単に出来事として提示するにとどまっているという事実から、これらが当時の人々の死生観や宗教的世界観に根ざして形成されたものであることが理解される。自然現象に基づくこれらの表現は、死を現実の過程として再現するものではないが、人間の死を環境における現象へと置き換えることで、その不可視の出来事を理解可能な形に転換しているのである。したがって、この種の婉曲表現は日常的な過程との類推に基づきつつ、象徴的な意味に加えて儀式的・宗教的な意味を帯びるものと考えられる。

第二カテゴリーの婉曲表現は、使用例の数から判断すると、第一カテゴリーの婉曲表現よりもますます広く使用されるようになっているが、同時にその使用方法にはほとんど変化がみられない。当然、作品の中ではさまざまな形で現れるが、これらの変化は言語の文法的な特徴によるものである。使用期間中、第一カテゴリーの比喩表現の比較対象のように、変化する部分はなかった。さらに、第二のカテゴリーの婉曲表現は、その元の意味に応じて追加の意味のニュアンスを持っている。この特徴は、死を比喩的に表現するために使用された第一カテゴリーの婉曲表現には見られない。第二カテゴリーの「死」を表す婉曲表現は、作品における死の状況に応じて使用される。

その結果、二つのカテゴリー間における移行の過程が明らかとなった。具体的には、第一カテゴリーの婉曲表現は『万葉集』および『古今和歌集』に確認されるが、『源氏物語』に至ると比較要素を失い、第二カテゴリーへと移行している。また、一つの作品の内部において、第一カテゴリーと第二カ

テゴリーの婉曲表現が併存する事例も存在する。しかし、用例の分析からは、カテゴリー間の移行は第一カテゴリーから第二カテゴリーへの一方向的なものであり、その逆の移行は生じないことが明らかとなった。

本稿では、『万葉集』、『古今和歌集』、『源氏物語』の用例を通じて、第一および第二カテゴリーに属する死の婉曲表現の発展的特徴と、両カテゴリー間における移行のあり方を明らかにした。今後の課題としては、調査対象を他の歌集や物語作品に拡大することが求められる。また、本稿で扱わなかった第三カテゴリーの婉曲表現についても検討を加えることで、死の婉曲表現全体の発展過程をより包括的に把握できると考えられる。

参考文献

（1）辻本臣哉「仏教の死生観―古典文学における死生観の変遷―」人間学研究論集、第4号、武蔵野大学通信教育部、２０１４年、pp. 37–40.
（2）加藤明「『万葉集』の挽歌における死にかかわる表現についての考察」東京女子体育大学東京女子体育短期大学、紀要47号、２０１２年3月、pp. 27–39.
（3）佐藤信夫・佐々木健一・松尾大『レトリック事典』大修館書店、２００６年、p. 54.
（4）片桐洋一『古今和歌集全評釈（下）』講談社学術文庫、１９９８年2月、p. 53.

引用文献

小島憲之 校注・訳『万葉集』（日本古典文学全集 編、１９９４年）
小沢正夫・松田成穂 校注・訳『古今和歌集』（日本古典文学全集 編、１９９４年）
阿部秋生・秋山虔・今井源衛 校注・訳『源氏物語』（日本古典文学全集 編、１９９５年）

（トカチェンコ・テチアーナ　本学博士後期課程）